

隠士 森本宗範瑣事

白井 伊佐牟

□ 要 旨

大和国式下郡大木村（奈良県磯城郡田原本町大字大木）の人、森本宗範は、柿本人麻呂の墓と伝承されていた、同国添上郡樅本村（天理市樅本町）の歌塚に、歌塚碑を建立し、人麻呂の遺跡を顕彰した人物として一部に知られている。しかし、自ら「隠士」と称し、他もそれを認めていた人物であるだけに、その事蹟は皆目不明である。

宗範が生涯を送った田原本町には、これと云った事蹟がないので、『田原本町史』には僅かな記述しかない。一方、歌塚を建立した天理市は、宗範の出身地ではないので、『天理市史』『改訂天理市史』には、歌塚に関連して名をあげるのみである。そこで主に郷土史誌や市町村史から、宗範に関する資料や記述をあつめてみた。その結果、宗範の享年、自筆

『歌塚縁起』・百拙元養撰并書「歌塚碑陰記」原本の所在等を確認することができた。

小稿では右のことを中心に関連する事項を紹介報告させて頂く。

□ キーワード

森本宗範 隠士 柿本人麻呂 歌塚 『歌塚縁起』

—

大和国式下郡大木村（奈良県磯城郡田原本町大字大木）の人
で、医者であった森本宗範（寛文十二年（一六七二）〜寛保元

年（一七四一）享年七十歳）は、柿本人麻呂の墓と伝承されていた、同国添上郡樅本村（天理市樅本町）の歌塚に、歌塚碑を建立し、人麻呂の遺跡を顕彰した人物として、一部に知られている。しかし、自ら「隠士」と称し、他もそれを認めていた人物であるだけに、その事蹟は皆目不明である。宗範は奈良県内では、田原本町・斑鳩町・新庄町・天理市の町史や市史にとりあげられているが、奈良県の代表的人物誌である『大和人物志』^[1]には、藤門周斎の項に、和歌の師としてその名（森下宗範）が見えるだけで、全国的には無名に近い。そんななかで、近時『和学者総覧』や『国書人名辞典』に、宗範が立項されたのは喜ばしいが、没年を前書は「享保頃」、後者は「生没年未詳」としている。研究者に広く利用され、かつ信頼度の高い二つの辞典に、このように記載されてしまうと、今後宗範の生没年は未詳ということで、定着してしまう恐れがある。筆者は現在にまたま大字大木に住んでいることもあって、せめて享年だけでも明らかにしておきたいとの思いから、数年前より調査を始めた。その結果、宗範の後裔が大字大木に在住されていること、享年が七十歳であったこと、宗範著『歌塚縁起』原本、それと関連して歌塚碑の表面「歌塚」、裏面「歌塚碑陰記」の原書が現存していること、更に『歌塚縁起』『歌塚碑陰記』は早くに翻刻されていることなどを、知り得た。

小稿では以上のことを中心に、その周辺のことどもも、報告させていただく。

二

本論にはいる前に、従前いかに宗範に関する知見が乏しいかと云うことを知ってもらう為に、『和学者総覧』^[2]次に『国書人名辞典』^[3]の順で、宗範の項をあげておこう。

姓名 別称 (1)生国 (2)住国 没年

10633 森本宗範 (号)墨流斎 大和城下郡 享保頃

享年 学統 備考(参考文献)

大木村医、『奈良県磯城郡誌』(369)

森本宗範むねもと ねのり 国学者・医者（生没）生没年未詳。江戸時代前期の人。

〔名号〕名、宗範。号墨流斎。〔経歴〕大和国式下郡大木の
人。

〔著作〕歌塚縁起（享保八）和陽皇都廟陵記

〔参考〕増訂国書解題 和学者総覧

宗範に関する基礎資料は、右二辞典の備考と参考から、一見すると『奈良県磯城郡誌』と『増訂国書解題』の二書のようにみえる。しかし、『増訂国書解題』に載せる『歌塚縁起』と

『和陽皇都廟陵記』の解題と、『奈良県磯城郡誌』の「森本宗範」の項に載せる両書の解説は、ほぼそっくり同文である。

佐村八郎編『国書解題』は、明治三十年「第一冊を刊行、同三十三年までに計二十五冊を刊行した。同年これらを合本し刊行。(中略)同三十七年増訂第二版として出版」されている。

一方、『奈良県磯城郡誌』は、「明治三十八年の原稿に基き大正三年委員を嘱して、任に該らしめ、大正四年十一月を以て業を終」えている。このことから、『奈良県磯城郡誌』は、『増訂国書解題』によっていることが分かり、宗範に関する基礎資料は『増訂国書解題』一書だけと云うことになる。『和陽皇都廟陵記』は、江戸時代の陵墓関係の文献目録にその名は見られず、『補訂版国書総目録』に「国書解題による」とある通り、現在佚書となっており、『増訂国書解題』によってのみその概要が知られるに過ぎない。なお、『奈良県磯城郡誌』の「森本宗範」の項は、宗範と生田伝八郎との逸話が見えるので、後述の所から水木要太郎の執筆と推定される。

宗範の墓は『田原本町史』に載せる通り、大字大木の西隣り大字大安寺の浄土宗易住山昇教院教安寺に在る。「砂岩製の高さ八〇センチの墓石」は、平成二年一月に、大字大木住の後裔、森本幸作氏により台座二段を新たに設け据直されている。その墓碑銘は次の如くである。

隠士 森本宗範瑣事（白井）

〔表〕 森本宗範之墓

〔裏〕 姓森本名宗範（以下剥落）

養心庵行（同右）

皆寛保元（同右）

その没年は寛保元年（一七四一）であった。養心庵は号とみてよいだろう。

かつて大和国史会発行の月刊機関誌「大和志」（自昭和九年十一月至同十九年六月）に、大和の歴史上の著名人士の奥津城に詣で、事蹟を紹介すると共に、墓碑銘などを採録している「額づきの記」が、連載されていた時期があったことを思い出した。「総目録」にあたってみると、第四卷第十一号に、島本一「森本宗範の墓に詣でて」を見い出した。氏が教安寺を訪れ展墓し、墓碑銘を採録したのは、昭和十二年「十月の末日」であった。表面は現在と同じ状態であるが、裏面は現在剥落している箇所が、当時は残っており、次のように判読されている。

姓森本名宗範□□□

養心庵行齡七十而卒

皆寛保元辛……………

宗範は寛保元年に享年七十歳で卒したのであった。逝去の月日は、その部分が剥落しているので分からないが、寛保と改元されたのが二月二十七日であるところから、この日以後である

う。生年は逆算して寛文十二年（一六七二）と云うことになる。

「今人丸」と称された烏丸光栄（元禄二年（一六八九）〜寛延元年（一七四八））の門人であった、斑鳩並松の人藤門本弘号周斎（元禄五年（一六九二）〜宝永五年（一七七六））は、「墓碑の銘（碑文章稿）」に「始師事隱士森下宗範者」とある如く、宗範の弟子であった。周斎に次の一首がある。

森本宗範居士よみて手向の一首

水鳥（明和九年十二月三日手向）

朝ゆふのかぜ吹こぼる いけの面に

かずもしられず 遊ぶ水とり

『斑鳩町史』¹⁰に、「これは宗範三十三回忌の手向歌である。」

と注を付しているが、明和九年（一七七二）は実際は三十二回忌にあたる。

やはり烏丸光栄の有力門人であった、加藤信成（貞享四年（一六八七）〜寛延四年（一七五二））の家集『承露吟草』¹¹に、宗範の古稀を言寿いだ次の一首を見出し出した。

竹契還年 森本宗範七十賀

七三四 行末の齢に契れふしことに千世をこめたる宿のくれ

竹

家集には宗範との関係で詠まれた、七一春鳥 和州歌塚三月十八

日 影供当座、九八晝帰雁 和州歌塚当座、一〇四栽花 和州歌塚影供、

一三七月前花 和州歌塚影供の四首が納められている。

三

次に、宗範著『歌塚縁起』、続いて彼が柿本寺跡の歌塚に建立した歌塚碑の調査報告に移ろう。

和爾下神社の西側の柿本寺跡に、四尺ばかりの小塚があり、「歌塚」と称され、柿本人麻呂の墓と伝承されている。この伝承がかなり古くからのことであることは、次の二史料からうかがえる。

寿永三年（一一八四）に顕昭が著わした、『柿本朝臣人麻呂勸文』¹²の「墓所事」に、「添上郡石上寺傍有社。称春道社。其社中有寺。称柿本寺。是人丸之堂也。其前田中有小塚。称人丸墓。（中略）柿本寺只有礎計。人丸墓者四尺計之小塚也。」とある。

建暦元年（一一二一）末以降建保四年（一一二六）閏六月以前に成立した、鴨長明の『無名抄』の「二六 人丸墓の事」に、「人丸のはかは、大和国にあり。はつせへ参る道也。人丸のはかといひて尋ぬるには、しれたる人もなし。かの所には、うたづかとぞいふなる。」とある。

人麻呂の生没年やその没した地ならびに墓所は不明であるが、いつ頃からか、没年は神龜元年（七二四）三月十八日があてられるようになった。享保八年（一七三三）は、人麻呂没後一千年にあたると云うことで、人麻呂ゆかりの地の一つである石見国高津の柿本神社が、正一位に叙せられた。このときにあたり宗範が、以前より柿本寺の僧に乞われていた、歌塚の來歴を著したのが『歌塚縁起』であり、歌塚を顕彰するために柿本寺の僧と共に建立したのが、歌塚碑である。

『歌塚縁起』原本や、歌塚碑の表面「歌塚」並に裏面「大和州添上郡樅本郷人麻呂歌塚碑陰記」（以下、「碑陰記」と略す）の原書は、樅町膳史の浄土宗佛現山極樂寺第十七世藤谷智守師が、他の柿本寺の什物と共に、極樂寺で所蔵保管されている。柿本寺の什物を藤谷師が所蔵保管されているのは、明治元年に發布された神仏分離令により、柿本寺が同二年に「廃寺にされる時に、極樂寺十五代藤谷智丈上人が、私財を出して私物にしたのが柿本人麻呂由縁の歌塚、周辺の田、畑、柿本寺でありま^す。それらの木版木、巻物、掛軸、仏像、柿本人麻呂神像等^{ども}が極樂寺で保管^され、これらを師が受け継がれたことによる。柿本寺の当初の位置は、治道社と称された和爾下神社の參道西側の歌塚碑あたりから、その北方にかけて所在したことは、鎌倉期製作の柿本宮曼荼羅によってうかがえ、その残存礎石か

ら奈良時代の創建と推定されている。このところから室町時代頃に、現樅本町高品の樅本小学校西方に移転し、前述の如く明治二年に廃寺となった。

和爾下神社すなわち治道社と柿本寺の關係、柿本寺の零落、歌塚の退転を、宗範は『歌塚縁起』で以下のように叙している。此所古老つたへていはく、むかしは人麻呂大明神とて大社にして、数百の村里此神氏子にて、別当の坊を柿本寺と号し、塔頭あまた軒をならへ、歩を運ぶ貴賤老少昼夜をわかざりかとも、いつしか霜露の爲にくたされ、薨破霧燒不斷香扉落月桃常住燈て寺号のみ残り。当寺もすぐに怠転すべかりしを、時の住侶これをなげき、古墳より一町計西に、かたはかりの一字を再興し、智證大師真作の薬師を安置し、わづかに柿本寺の名をのこせり。彼歌塚もすかれて田と成へきを悲しみ、先の住僧沙門玄清一間四面の小堂を造立して、板にきざめる人丸の尊像を安置したり。此像むかしより此寺につたへ侍しかとも、誰人の図せるとも明かならず。

『歌塚縁起』、「碑陰記」は、大和史学会発行の機関誌「やまと」第一巻第三号・柿本人丸号（大正十三年三月八日）に、水木要太郎が翻刻している。

『歌塚縁起』一卷はその箱書に

歌塚縁起之標題者／冷泉大納言爲村卿入道止靜心院澄覺／公

之御染筆也

とあり、題箋は冷泉為村（正徳二年（一七二二）〜安永三年（一七七四））の揮毫である。この為村の題箋と、巻軸を繻くと流麗な文字と装潢の立派なことから、筆者は直感的に宗範の自筆原本とみたが、巻末の次に掲げる佐々木善行の識語にいたり、そのことがはっきりし、為村の題箋が付され、立派な装潢がなされているわけも分明になった。

明和庚寅の秋七月ゆへありて、此一軸を冷泉入道前垂相公の尊覽に入奉りしに、返し給はるとて

年を経てくちせぬ筆の墨流しふかくくみえし水くきのあと名に高きかけは治道森下の言の葉とをく残る歌塚

かく二首の金玉をなん下し賜ふ、今は此世を去し宗範も、苔の下にていかに歎はしからざらんやおほゆる、又其子むまこもあるなれば、父祖の此道にふけてりて、今はた埋れたる名も高く聞へあけしことを歎はしめ、なきからをおさめし墓へも手向させはやと、藤門翁にこれをはかりぬ、翁はもとよりはやく宗範の門人にしあれば、予か微志を感じ、彼旧居にもち行、遂に菩提所の寺の宝ものとしとゞめ置侍る、つらくまた此縁起を見るに、あまねく古き文を探りかふかへて、その辞もうるはしくつゞりしものから、歌塚の世々を經りて後に考に事足ぬべきなれば、此まゝ白魚のすみかとなし、つゐ

に烏有に帰せんことをかなしみ、ひそかに装背せんと思ふに、はからず

公より標題に自ら御筆を染させ給ひ、其余の装具まで取集め下し給ふ、さてしもなをざりに過へくもあらず、やがて工人に命し背装し、歳月を巻のすゑにするすことしかり

庚寅秋九月

佐々木善行謹識

明和庚寅は明和七年（一七七〇）で、宗範没後二十九年になる。佐々木善行の何人たるかは分からないが、藤門翁は藤門周齋である。『歌塚縁起』を為村の尊覽に供したのは、先の周齋の手向の一首と考へ併せると、宗範の三十三回忌との関連があると見られ、菩提所の寺は教安寺であろう。本書執筆の時期は奥書に次のように記されている。

享保第八癸卯年三月十八日 城下郡大木村之隱士墨流齋 森

本宗範 謹著之

『歌塚縁起』には奥書に続いて「柿本寺会和歌写」として、兼題三十人三十首と当座三十人（兼題と同一人）三十首が収められている。そのよしを『歌塚縁起』に、次のように述懐している。

我ともから生を此国にうけ、居を哥塚に遠からずト、おほけなくも此道に心さしを運び、かゝる遠忌にあふ事、黄河の清

るを汲、松樹の花を手折に同じ、此時いさゝかの恩謝をまな
さずして、いつをか期すべきと、心さしふかきかれこれにすゝ
めて、言志といふ兼題をさだめ此陪 御影前懐紙を捧げ、三
十首の当座の短冊を探りて、各つたなき言葉におもひをのべ
奉納し、愚願満足し畢

宗範の兼題と当座のみ次に掲げておく。

雪と見し心の花のひかり猶あふくたかき山跡言のは

寄花祝

風ふかぬ御代の春とて□□をわすれてぞ見る花の下陰

(□□筆者難読)

『歌塚縁起』執筆のいきさつもついでに引用しておこう。

予壮年よりあまたたび此所にまうで侍しに、或時あるじの僧
いはく、此寺に旧記ありといへども、紙蟲のすみかとなつて、
浜千鳥あとかすかなれば、見る人のまとふのみ也、願はくは
増益して、一卷の假名縁起を作せんことをこふ、本より愚昧
のやつかれ、(中略) 千重百重に辞して年月を過し侍れ共、
(中略) 幸成哉、爰に六諭居士元夢さいつ頃影現寺の縁起を
編集し給ふを、伝写してもてるを杖柱として、物するになん
侍る、見む人其筆跡を盗めるの科を赦さん事をねがふ。

六諭居士元夢とは平間長雅(寛永十三年へ一六三六)へ宝永
七年(一七一〇)のこと、「影現寺の縁起」は宝永四年に

隠士 森本宗範瑣事(白井)

著わされており、題箋に「柿本山影□□」とあり、「神道
大系」神社編五・大和国に、「柿本神社縁起」の名で所収され
ている。北葛城新庄町柿本の柿本神社は、やはり人麻呂ゆかり
の地の一つで、柿本山影現寺はその別当寺であった。本殿左横
に元和元年(一六一五)に、当時当地を領していた郡山藩主松
平日向守信之が建てた石碑があり、表面に「柿本大夫人麻呂之
墓」、裏面に林整宇(鳳岡)撰文の碑陰が刻まれている。その
後享保十四年(一七二八)年には、「和州葛下郡柿本邑影現寺
柿本明神祠堂縁起」と云う絵巻も作られている。影現寺でもこ
のように人麻呂のゆかりの地としての顕彰と、併せて人麻呂追
慕の歌会が催されており、宗範や周斎も奉納している。『新庄
町史』に宗範の次の三首が採録されている。

享保八年三月の人麻呂一千年祭にあたり奉納された、「正一
位柿本明神一千回忌影現寺奉納五十首和歌」に

朝鷺

森本宗範

梅の花、阿半きつ雪に字九ひ寸の
弥富の朝きの声もこほれぬ

同十三年に影現寺開基眞濟僧正の八百七十年忌の折の、「眞
濟僧正八百七十回忌追福和歌」に

立春霞

森本宗範

いくめぐり空は霞のへだつれど

おなしその世の春や立らむ

同十七年の「和州柿本村影現寺奉納柿本社百首和歌」に

関鷄

森本宗範

あふ坂や行もかへるもまちいてて

鳥の八声にこゆる関の戸

この他に宗範の詠歌として、田村吉永氏が『大和志』第四卷第七号に、次の二首を採録されているので、ここに紹介しておく。

業平朝臣八百五十回百首和歌不退寺奉納

宗範

古事歌

法のため年毎におれはさくら花ちりかひくもる寺の庭もせ

五月中の八日人麿前にあちさるの盛なるを捧げて 宗範

神も今華のよひらにこゝろをもわけてやめてん人の手向も

『歌塚縁起』は『補訂版国書絵目録』に、内閣文庫に明治一〇年の写本があると記載されている。それは現在国立公文書館に架蔵（請求番号二〇一〇五三八）されており、奥書に「明治十年二月巡回之節膳写 内務省御用掛従六位岡谷繁實」とある。

岡谷繁實は『名将言行録』の著者として知られている。『天理市史』の「極楽寺」の項に、「一、歌塚縁起 一卷

享保八年大木村の森本宗範が著したもので、これは明和七年の写本」とあるのは、佐々木善行の識語をよく読まず、「明和庚

寅」を書写の時期と、早とちりしたのであろう。『改訂天理市史』も実物にはあたらなかったようで、前者の誤りを踏襲している。

四

宗範と柿本寺の僧が享保十七年に、歌塚を顕彰するために、

歌塚碑を建立した。歌塚は当初の柿本寺跡、和爾下神社の参道

西側、児童公園になっている一画にあり、歌塚碑が建てられて

いる。歌塚碑の現状は材質が砂岩のため風化が進んでおり、裏

面の「碑陰記」は磨滅が甚だしく、茂った雑木の下にあるので、

湿気が多い上に、降雨後の雪などの影響で全面に苔が生じ、下

部は剥落して、判読できる文字は全体の半分程度である。

「碑陰記」は後述の如く既に紹介されているが、ここに「碑陰記」原本を掲げておく（異字体は正字に改めたがよく使用されるものはそのままとした、闕字は原本通りにした、／は改行を、□は剥落をあらわす）。

大和州添上郡樺本郷人麻呂歌冢碑陰記

前住山城州天王山佛國禪寺嗣祖沙門百拙元養撰并書

象緯不測闔於上嶽瀆之大觀於下使之熙熙焉蒼蒼焉者神已易日

陰陽不測謂之神夫是之謂矣爰茲嶽降舉動成典刑言吐為綺

章德翊政治功勒鼎彝律被管絃至其死生出處亂費乎白雲卷舒野

鶴僊僊不可將衣於鄭龍於越降嶺遠東而蹤跡／焉所以諡法民

無能名謂之神爾吾國倭歌神者曰人麻呂生於柿樹下以柿本為姓
以歌獨步古今 天智帝聞之徵初起／歷任 持統文武之朝

及其化諸州同時告其訃云於戲慌忽杳冥固無得而詳焉大和州添
上郡樸本郷有古墳曰歌冢案藤清輔家集曰聞大和國石上柿
本寺有人麻呂家乃題和歌於辛木以契不朽又藤家隆講式曰石上
寺傍建一草堂以葬焉／身理龍門名寶 鳳閣鴨長明亦曰人丸

墳者在於大和州蓋詣泊瀨之道而土人唯呼曰歌冢也父老曰曩者
廟曰人丸大明／神寺以柿本稱焉僧房盤爵後兵馬闕復州郡幅

裂遺蹤財在爾享保第八癸卯春石見州高角鴨山僧奏是茲丁於人
麻呂化／後一千年矣 太上天皇有詔加爵正一位大凡海寓

有歌神祠者咸相喜而賀曰於乎 帝道孔昭神德爾昌烈曜於千
／載前垂光於千載後罔不列其管磬鐘鼓備其鼎俎共其黍盛勿勿

乎其欲其饗之也粵僧 幹綠樹石墳上 賜紫寶鏡尼／公主
壁窠歌冢二大字龍蛇飛騰 公主名豐字德巖乃 明曆帝之皇

女也或問如今稱人麻呂之墓維五日石之高角者／曰播之明石
者日本州者孰是余曰吁神之為靈雄雌非有漏瀾非無若虛空之

通也若幽谷之響也無所往而不在也寧可／迹迹而求乎其神之
化也諸州共告訃焉所謂陰陽不測民無得而名焉不亦宜乎唯據藤

氏二公及長明舊記蓋葬神骸於此／邪非邪僧 與隱士森宗範也
者請余誌於碑陰峻拒不聽範也以歌隱者述冢之來由審矣於是乎

隱士 森本宗範瑣事（白井）

記享保龍集壬子年春三月朔戊午十有八日乙亥

柿本寺僧 逸民森宗範等立

碑表面の「歌塚」を揮毫された、「賜紫寶鏡尼公主（中略）

名豐字德巖、乃明曆帝之皇女」は、『講談社日本人名大辞典』

所収「理豐女王」の項が、恰好の解説になっているので、その

まま引用させて頂くことにする。

りほうじょおう（理豐女王）（一六七二—一七四五）江戸時

代前期—中期、後西^い天皇の第十一皇女。寛文十二年五月

二日生。母は清閑寺共子。理忠女王のもとで得度して京都宝

鏡寺二世となり、寺勢の興隆につとめる。宝永四年景愛寺

住職となり、紫衣しをゆるされた。書にすぐれ、絵は狩野周

信に学んだ。延享二年五月十二日死去。七四歳。本覚院と追

号された。幼称は櫃宮^{かしの}みや。法名は徳巖理豊。著作に「胡

蝶^{こちの}の夢語^{ゆめが}たりが。

「碑陰記」を撰し書した百拙元養（寛文八年（一六六八）—

寛延二年（一七四九））は、黄檗宗の僧で山城伏見の仏国寺九

世。近衛家熙・烏丸光榮の帰依をうけ、詩歌・茶道に通じ書画

にも優れた人物であった。『国書人名辞典』に、彼の著作とし

て「柿本寺歌塚縁起（享保八）」をあげているが、「碑陰記」

と混同したのであろう。

宗範の姓森本を、森下とするものや、「碑陰記」から森とす

るものもあるが、下は本と同じく「もと」と訓じるので通用したものであり、森一字を用いるのは、「碑陰記」に、藤原清輔を藤原清輔、藤原家隆を藤原家隆と、記しているのと同巧である。

宗範が歌塚碑を建てるにあたり、碑陰の撰並に書を百拙元養にどのようにして依頼したのか、その経路は詳にしがたいが、宗範の弟子の藤門周斎、宗範と交流のあった加藤信成が、烏丸光栄の門下であり、元養が烏丸光栄の帰依を受けていたことから、烏丸光栄の人脈を介してなされたものであることは、間違いないあるまい。

斎藤茂吉氏「人麿影供・人麿碑文」に「〔六〕 榑本の碑」として、「碑陰記」が収録されている。自序に人麿碑文は、「友人に依頼して实地に踏検してもらった」と記しているように、氏が実見したのではない。先に紹介した「やまと」に、歌塚碑の表面の写真が掲載されている。それを見ると、現状と同じく下部が剥落しており、裏面も同じ状態だったと推定される。原本に「帝道孔昭」とあるのに対し、「榑本の碑」は「帝道孔胎」になっている。「やまと」所載の水木翁の翻刻も「帝道孔胎」になっており、「榑本の碑」の踏検者が、原本にあたったのではなく、「やまと」所載を参考にしたことがうかがわれる。ちなみに、水木翁が宗範と生田伝八郎との逸話を、「人麿の遺跡と人麿に関する事物」で、次のように紹介されていること

の真偽の程を、検討しておきたい。

「故北畠男爵⁷⁷の話にはかの崇禪寺馬場の仇討で有名な郡山の藩士生田伝八郎が崇禪寺馬場で遠城治左衛門等を兄弟を返り討して負傷した際この宗範に療治を願うた。すると宗範は立派に傷を癒した後さて伝八郎を座敷に請じ九寸五分をさしつけて詰腹きらした義人だと言うてゐられた。」

敵討についての唯一の研究書と云われている、平出鏗二郎著『敵討』に、「崇禪寺馬場の仇討」は、「撰津国西成郡浜村崇禪寺松原遠城・安藤兄弟の敵討」として、とりあげられている。

伝八郎が傷を負うたことや、切腹したことについて、小稿に必要なところを摘記すれば、次の通りである。

正徳五年（一七一五）十一月四日に、崇禪寺松原で遠城・安藤兄弟が弟の仇である伝八郎と闘い、兄弟は「伝八郎を始め、その他四人までに手傷を負わせたけれども、多勢に無勢の悲しさは切死にやみやみ返討になってしまった。（中略）その後郡山の城下の近傍常念仏堂（常称寺）の墓地に武士体の男が書置を残して見事に切腹して死んでいた。」

伝八郎が傷を負ったこと、切腹したのは事実だが、宗範のかかわりは見られない。『ふるさと大和郡山歴史事典』の「敵討崇禪寺馬場」の項に、切腹の日は十一月二十四日とある。ここにも宗範のことは何ら触れられていない。

赤穂四十七士の吉良邸討入りに代表されるように、敵討は事実には尾鱗が付き、著しく事実と異なることが多い。宗範と伝八郎の逸話もその類とみなしてよいだろう。

最後にもう一つ、『改訂天理市史』^⑩の、「歌塚碑建立に奔走した森本宗範は『明翰抄』(『第四二』、『奈良連歌師』、『統群書類従』九二七卷)に、宗二系の末流として『宗範』とあるその人であろう。」との記述について触れておきたい。この「宗範」が森本宗範と同一人である論拠が示されていないので、その当否は判断しがたいが、『明翰抄』の成立年代を目安にしてよいだろう。『群書解題』に、作者・成立とともに不詳とした上で、「内容をみると、後西院(在位一六五四―一六六三)を「今上皇帝」としている。また、徳川氏の項に綱吉(一六四六―一七〇九)の名も見える。綱吉將軍在職中の成立とすればもう少し時代が下ることになる。(中略)おそらく、明暦(一六五五―一六五八)・万治(一六五八―一六六一)の頃に、門跡とか連歌とかに関係のある者が撰録したものである。」と推定している。これによれば、林宗二(明応七年(一五〇〇)―天正九年(一五八一)末流の「宗範」は、森本宗範より早い時代の人と見た方がよいようである。

五

隠士 森本宗範瑣事(白井)

宗範は生涯をおくった田原本町には、これと云った事跡がないので、『田原本町史』にはとりあげられているが、その記述は一頁に満たない。『天理市史』『改訂天理市史』は、宗範が当市出身者ではないので、歌塚に関連して名をあげるのみである。また著書『歌塚縁起』は原本が現存するにも拘らず、『補訂版国書総目録』にも、明治十年の写本を掲げているだけである。そこで主に郷土史誌や市町村史から、宗範関係の資料や記述をあつめ紹介するのが小稿である。しかし、『田原本町史』『天理市史』『改訂天理市史』『新庄町史』『斑鳩町史』の当該項執筆者らが、ここに紹介したようなことを知っておられたことは間違いない、宗範が主題にならなかったで、必要最小限度の記述にとどまらざるを得なかっただけである。『田原本町史』に参考として「人麿の遺跡と人麿に関する事物」をあげ、『新庄町史』^⑪に享保十三年に宗範は「五十七才」と明記している。小稿が先学の学恩に専らよっていることはご覧の通りであるが、森本宗範の事績が再認識されることを願ひ、あえて筆を執った次第である。

〔註〕

(1) 明治四十二年八月。

(2) 國學院大學日本文化研究所編(平成二年三月)。

- (3) 第四卷（平成十年十一月）。
- (4) 『国史大辞典』第五卷（昭和六十年二月）「国書解題」の項（益田宗氏執筆）。
- (5) 大正四年十一月。
- (6) 奈良県立奈良図書館郷土資料室「絵図に見る江戸時代の『陵墓』探索と修理」の〈江戸時代の陵墓関係文献（一）—基本史料〉（平成六年十月、同七年七月増補改訂）。
- (7) 第八卷（平成二年十一月）。
- (8) 本文編（昭和六十一年九月）。文化財編第三章金石文「森本宗範墓碑」。
- (9) 昭和十二年十一月。
- (10) 昭和三十八年九月。各説、人物「藤門周斎」。
- (11) 『皇學館論叢』第三十三卷第一号（平成十二年二月）・同卷第二号（同年四月）・同卷第三号（同年六月）に、上・中・下の三回に分け、島原泰雄・中川豊・中條敦仁の三氏によって翻刻されている。
- (12) 『群書類従』第十六輯和歌部・所収。
- (13) 築瀬一雄氏編『校訂鴨長明全集』（昭和四十六年八月）、所収。
- (14) 極楽寺発行の説明文。
- (15) 本号を特に「柿本人丸号」としたことについて、「編輯余録」に次のように記している。
- 本号は昨年六月奈良女子高等師範学校内で举行された柿本人丸一千二百年祭を記念するために全祭典の有様と全日の講演とを編輯してやまと第壹卷第三号を特に柿本人丸号としたのであつた。
- (16) 昭和六十二年三月。
- (17) 昭和四十二年二月。各説、文学、短歌。
- (18) 昭和十二年七月。
- (19) 第一卷（平成元年九月）。
- (20) 昭和三十三年三月。各説第三章宗教、二社寺（六）椽本地区「極楽寺」。
- (21) 上巻（昭和五十一年三月）宗教、第二章寺院五椽本地区「極楽寺」。
- (22) 平成十三年十二月。
- (23) 『日本仏教人名辞典』（平成四年一月）、『国書人名辞典』第四卷（前掲）の「百拙元養」の項。
- (24) 同氏著『柿本人麿』総論篇（昭和九年十一月、所収）
- (25) 小島貞三氏「柿本寺と歌塚」（『大和志』第三卷第七号、昭和十一年七月）にも、『歌塚縁起』と「碑陰記」が翻刻されているが、後者は水木翁の翻刻を参考にしておりとみられる。

(26) 「やまと」第一卷第三号。

(27) 北畠治房（天保四年へ一八三三）（大正十年へ一九二一）
一〇〇。生駒郡斑鳩町出身。

(28) 明治四十二年八月文昌閣刊を平成二年五月に中公文庫より刊。

(29) 昭和六十二年五月。

(30) 下巻（昭和五十一年三月）文学第四章近世の文学と郷土、
二歌塚碑の建立と柿本寺の修復。

(31) 第二十二巻（昭和四十一年八月）猪熊兼繁氏執筆。

(32) 本文編（前掲）歴史編・近世・第六章信仰生活と文芸の
興隆、第二節田原本地域の文芸。

(33) 註（17）に同じ。

〔付記〕

小稿を成すにあたり、ご所蔵の『歌塚縁起』等の閲覧をお許
し下さった藤谷智守師、またご架蔵の「やまと」柿本人丸号
をお貸し下さった中田太造先生のお二人に、厚く御礼申し上
げます。

—平成十六年九月二十二日—

（しらい いさむ・桜井市文化財保護審議会委員）

隠士 森本宗範瑣事（白井）